Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-27

日本の航路図

南波, 松太郎

(Citation)
海事資料館年報,4:1-7

(Issue Date)
1976

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005848

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005848

日 本 の 航 路 図

南 波 松 太 郎

1. 航 路 図 と は

一般の船（客船・荷船等）が常に往来する船の道筋を航路といい，これを地図に記入したものが航路図である（特定の船が航海した航跡は航海図で航路図ではない）。この航路図は海路図とか航路絵図ともいわれ，普通は各港間を線でつなぎ，原則として港距（両港間の距離）と方位とが記入されている。

この航路図を大別して，（甲）航路を主として記載し、地図そのものの地形や河川・道路・集落等にこだわらないものと，（乙）一般の地図に航路を書き入れたものとがある。普通に航路図といえば前者（甲）を指すのであるが，一概に斯うとはいい切れないのである。即ち両者をよく調べて見ると、後者（乙）の方が細かく航路図が記入され，却而前者（甲）の方が大雑把なものがあり，時には航路の書き入れがないのもあって，何れが航路図かわからないのが実状である。本稿ではとに角（甲）を中心として，江戸期のものについて述べる事とする。

尚航路図(甲)には，港への出入並に船繋りの難易,その他灯明台・船番所等が記されている。しかし(乙)の方にはこの記入のないのが多い。

2. 航路図の起源と沿革

我が国は四面環海の島国で、しかも千数百年前から已に高度の文化国家を形成し、奈良時代には日本国の地図も出来て居り、爾来海を隔てて遠く隋・唐・粛慎・勃海・朝鮮・蝦夷方面との交渉があり，その航海の記録はあるが残念ながら航路図はないのである。

平安時代には京都を中心として，７つの海道〔東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海（山陽道につづく）の７海道〕が定められ，本州・四国・九州その他の島々を結ぶ海上には，夫々航路が記入されている。これが我が国における航路記入の最初であり，航路図の起源である。当時の日本地図は，奈良時代の行基菩薩作と伝えられる行基式図である。又我が国に残存している最古の日本図は，桓武天皇の延暦24年（805）のもので，矢張り行基式である。これら古代の日本諸図に描かれている７海道の航路には多少の相違がある（第１表及び写真第１・第２参照）。

これを起源として地図の発達と共に，特に江戸時代に入って，日本図は元より地方図或は国々の地図等が多作され，これに海運の発達と相俟って，諸地図に航路が記載されるようになり，ついで専門の航路図が作られるようになった。これらの航路図は，はじめは手書きであったが，後には印刷刊行されるようになった。

第1表 行基式日本図各種

図名＼航路	和泉淡路阿波	紀伊淡路阿波	長門豊前	長門筑前	筑前壱岐対馬	肥前壱岐対馬	出雲隠岐	若狭越前	越後佐渡	越後止島	出羽止之島	伊勢尾張	安房伊豆島
輿地図 延暦24年(805)(手書)		○	○		○		○		○		○		○
唐招提寺蔵 大日本国正統図(手書)	○			○		○	○	○	○				
浄得寺蔵 大日本図屏風(手書)		○	○			○	○		○				
慶長版拾芥抄記載 大日本国図(木版)	○		○		○		○		○				
行基菩薩説 大日本国図(木版)	○		○			○		○					
南胆部洲 大日本国正統図(木版)		○	○			○		○	○	○		○	
発心寺蔵 大日本国屏風(手書)	○			○				○				○	

㊟ 明国に流出した行基式日本図には伊豫―豊前の航路図が入っている（日本一鑑所載）

3. 航路図の手書と印刷の社会性

航路図は元来船乗り達が用いるもので

あるが，海運関係者その他の人も利用する事があり，可なりの数が必要である。所がその初期は手書であるから，その書写が面倒で数多く作れない。従ってこれを書写した特定の人だけが利用し得て，他の多くの人々にとっては高根の花という事になる。即ち手書では社会への普及性が少ない。つまり社会性が少ない事になる。書写のものはその数が少ないので稀少価値があるとはいえないのである。こういう実用的のものは社会性があってこそ値打があるのである。

一方印刷即ち当初は木版，後には銅版も現われるが，この印刷は所謂多量生産が出来るので，同じものが多数の人々の手に渡り，普及性が高い。即ち社会性が大きい事になる。従って実用的のものは必ず印刷されねばならないのである。考うるに，一般の地図は江戸初期の寛永頃に木版のものがあり，航海書は元禄がその初見である事から見ると，航路図の印刷刊行は案外遅いのである。即ち元禄より50年遅れた宝暦2年（1752）に漸く大阪—江戸間の地方的なものが刊行されたのが最初である。これは小型の折本であるがその後、独立の航路図も出版され、何れも大いに利用されたのである。即ち印刷物は大いに社会性を発揮したのである。各表を見ればわかるように，印刷刊行のものはその種類は少ないが，これは社会性が大きい事を示し，手書のものの数の多い事は社会性の少ない事を示しているのである。

4. 航海書と航路図

我が国の航海書の最初は，元和4年（1618）池田好運著の元和航海書であるが，これは南蛮式即ち洋式航法で，御朱印船等が使用する外航用のものである〔当時この種のもの二・三種あった。鎖国後延宝3年（1675）島谷市左衛門が，小笠原嶋に行った際には，この種南蛮式航法によっている。しかしこれは幕命によるもので，一般航海者にとっては，無用の長物で，只管沿海の可視航法であった〕。その後衣斐蓋が寛文7年（1667）に調査し，延宝8年（1860）に著わした海瀕舟行図は，我が国最初の沿海航海書である。その範囲は大阪以西（瀬戸内海—四国及九州沿岸）の，所謂西国航路で全国的ではない。しかし各港の状況を精しく記し，甚だ親切に出来て居り立派なもので，これにはキチンと航路図が入っている。しかしこれは手書きで伝写され社会性は少なかった。

江戸中期以降海運の盛行につれて，航海書も印行されるようになった。その印行の最初は，筆者の知れる所では，元禄15年（1702）「大日本航路細見記」であり，次いで元文3年（1738）刊行の「汐路之記」であるが，何れも西国が主となっている。その後幕末に到る迄に全国的のものが出版され，尚海運の発達と共に沖乗りが多くなり，天文航法の航海書も出来たが，残念ながらこれらには航路図が記載されていない。宝暦2年（1753）に大阪—江戸間の地方的のものであるが「南洋湊方角之図」が出版され，次に明和4年（1767）には下関—松前航路の「北海湊方角之図」が刊行され，つづいて刊年不明だが「西国海岸一覧」及びその他を併せて，天保13年（1842）に「大日本航路図上・下」折本2帖が出版された。これは全国航路図の刊行の最初であり又江戸期の最後でもあった。

尚天保13年刊「改正日本航路細見記」に挿絵として日本全航路図があり，又各地域の航路図も記載されている。しかし本当に航路図らしい航路図は，東海の一部だけのものであるが，天保11年（1840）刊の「改正東海舟程全図」である。これは折畳式で利用度が高かったと見えて，安政2年（1855）の写しが現存している。又弘化2年（1845）に「新製東海舟程全図」が刊行されている。

5. 航路図の分類

航路図の分類にはいろいろあり，装幀即ち綴本・折畳・折本・巻物・屏風等，或は手書か印刷か，印刷にしても木版か銅版かの差異がある。又彩色の有無の事があり，彩色にしても手彩か刷彩かのわけ方もあるが，ここではその航行区域によって，分類する事とする。下の如し。

(1) 日本全域
(2) 地方広域
(3) 地方狭域

以上各海域について少し説明を加えよう。

(1) 日本全域

日本全域のものは江戸中期以降のもので，古い時代のものはない。これによって我が国海運の様想がわかるのである。即ち江戸初期には全域の海運が大した事でなかった事を示している。その航路図は手書きの折本・折畳式又は巻物で，その資料は甚だ少ない。筆者等が各地へ採訪に行っても全国的のものには，余り出合わないのである。これらの図は何れも手書きであるから社会性が少ない。その印行されたのは，前述のように幕末天保13年（1842）の「大日本航路図上下」である。この航路図はよく売れたらしい。

航路図の折畳式のものは，日本図形が歪みながらも日本地図なる事がわかるし，又一見して全体の様子を摑み得る。しかし折本や巻物では，単に海岸線だけを表わしているので，全体的の事は把握出来ない欠点がある。しかし図上に船番所や灯台等が絵で描かれ，又海岸の凹凸がわかり，局部的には便利である。方位は所々に方位の印が記されている。折畳式には大型のものがあり，これらは狭い船中での使用には不向であろう。しかし地上でいろいろ打合せる時には便利である。所が折本や巻物は小型にまとまるので，船用には好都合である。

前記のように，我か国には全国的のものが少ないというその理由は何であろうか？。察するに，当時の廻船には全国に亘る海域に航行するものが少なく，日本海航路とか，大阪―江戸航路とか等の地方広域だけの航海の為めであろう。その内西廻り航路が最も長い航海になるが，それでも全域には及ばないのである。日本全域の資料例は第2表及び写真第3～第5に示す。

(2) 地方広域

地方広域とは，瀬戸内海・日本海・東海方面等可なり広範囲の海域を指すもので，この海域には夫々の廻船が最も多く活躍した所であり，瀬戸内海の如きは，已に桃山時代にその航路図が出来ているのである。

① 瀬戸内海（含北九州・長崎）

この水域は，我が国神話時代の国土創生の諾冊二神以来，国民のなじんで来た海域であり，又神武天皇御東遷の主航路であり，その後も幾多の歴史の海でもある。従って古来海の大道で，今尚各種船舶の航行で賑い過密化し，正に海の心斎橋筋である。又江戸期に入っては，江戸と長崎とを結ぶ大動脈となり，外国使臣の往来も繁くなり，特に西国大名の参覲交替の水域で，その座乗する御座船が多数往還したのである。従って，この海域には大名物といわれる豪華絢爛たる屏風や巻物の航路図が作られて居り，他の水域では見られない所である。本水域の資料は第3表及び写真第6～第10図を参照されたし。これに特異なものにつき少しく説明を加えよう。

(1) 瀬戸内海航路図（仮題）

本図は文禄2年（1593）の年号があり，蜂須賀藩旧蔵のもの

第2表 日 本 全 域

名称	数	版種	装幀	年号	航路表 港距	航路表 方位	港距	方位	備考
日本国島々針筋方位便覧	1舗	手書	折畳	江戸後期	○	○	—	—	神戸商船大学蔵，日本図の輪廓は山々の形から成る。九州南部を欠く
海路里程図	1舗	手書	折畳	同上	○	—	—	—	日本図形よろし陸内も精しい。方位は図の方位による
日本海上湊付並里程絵図	1舗	手書	折畳	同上	—	—	○	—	
日本海辺全図	2舗	手書	折畳	原図享保13年(1728)写文化5年(1808)	○	—	—	—	航路は蝦夷奥地に及ぶ。方位は図の方位による。
大日本海国針路里程	1舗	手書	折畳	江戸後期	—	○	○	○	
日本海辺航路図	1舗	手書	折畳	同上	○	○	—	—	
航路附録廻船針路之図	1舗	木版	折畳	同上	—	○	—	—	方位は図の方位によるコンパスローズラインを描き些少ながらポートラノ式を加味している
大日本海岸之図	4巻	手書	巻子	明和頃(1770頃)	—				4巻中瀬戸内海―長崎の一巻のみ航路入り，他巻にはなし
大日本海路図上・下	2帖	木版	折本	天保13年(1842)					東南上・西北下の2帖よりなる。前者のみ航路入り

第 3 表　地　方　広　域

海域	名　称	数	版種	装幀	年　号	備　考
瀬戸内海（含北九州・長崎）	瀬戸内海航路図（仮）	1巻	手書	巻物	文禄2年（1593）	文化庁民俗資料館秋岡文庫蔵 日本最初の航路図
	東海道西海道道中図巻	1巻	手書	巻物	元禄15年写（1702）	藤高家のものを写す。 大阪より長崎―壱岐―対馬の航路入り。
	大阪より長崎　海上航路図鑑	1巻	手書	巻物	宝永3年（1675）	神戸商船大学蔵
	瀬戸内海航路図（従赤間関至浪華城海上略図）	1舗	手書	折畳	天保12年（1841）	神戸商船大学蔵
	従大阪長崎迄海路図	1巻	手書	巻物	江戸後期	神戸商船大学蔵
	大阪より西国へ海上航路絵図	1巻	手書	巻物	江戸中期	神戸商船大学蔵
	自摂州至薩州海上尽絵図	1巻	手書	巻物	宝暦頃（1755頃）	神戸商船大学蔵 大阪―瀬戸内海―九州一円に及ぶ。珍らしい
	道中絵巻物	2巻	手書	巻物	寛文頃	豪華巻物内一巻は江戸―大阪陸路 二巻は大阪―長崎海路
	西海陸細見図	2帖	木版	折本	寛文頃	東海道細見図2帖と1組を成す。東海道の方は陸路図である。道中図初期のもの
	海瀕舟行図	4帖	手書	折本	延宝8年（1668）	舟行日記4冊がつく。 沿海航海書の最初のもの。
	西国海岸一覧	1帖	木版	折本		海瀕舟行図に則る
	瀬戸内海航路図	本間6曲1双	手書	屏風	寛文頃	神戸商船大学蔵。豪華な屏風である。
	瀬戸内海航路図	小型10曲半双	手書	船屏風	寛文頃	豪華な船屏風である。
	南海航路図	1巻	手書	巻物	寛文頃	神戸商船大学蔵　堺より四国南方を通り九州の南から西に廻り長崎迄の航路図
東海（含三陸方面）	従大阪至江戸海陸之図	1舗	手書	折畳	寛延3年（1750）	
	南洋湊方角之図	1帖	木版	折本	宝暦2年（1752）	江戸より大阪迄　大日本海路図東南上の一部 航路図なし
	自大阪至江戸海路図解	1舗	手書	折畳	文政7年（1826）	神戸商船大学蔵 超大型図地形大歪み航路精細。港距方位記入。陸内道路細し。
	改正東海舟程全図	1舗	木版	折畳	天保11年（1840）	三陸の宮古より下田迄の航路図入り
	新製東海舟程全図	1舗	木版	折畳	弘化2年（1845）	石巻市鹿島御児神社蔵
	豆相駿遠海路図 伊勢志摩紀伊海路図	2巻	手書	巻物	江戸後期	2巻で江戸―大阪の航路図となる 日本画式に描かれている
	四国兵庫大阪より江戸迄海路図	1舗	手書	折畳	安永頃（1775頃）	神戸商船大学蔵
	大阪より江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
	大阪より江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所（江戸―池尻）	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
	江戸より若山福良 江戸より北海道浦々里程図巻	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
	江戸より伊勢へ海上航路絵図	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
	東海大回之略図	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
日本海	北海湊方角之図	1帖	木版	折本	明和4年（1767）	大日本海路図西北下の一部 下関より松前迄の航路図入り
	北海大回之略図	1巻	手書	巻物		神戸商船大学蔵
	海路図（船頭書）	1巻	手書	巻物	幕末？	因島市立博物館にて見る
	海路図（船頭書）	1巻	手書	巻物	幕末？	塩飽本島本陣跡にて見る
	北国西廻海上之図	1巻	手書	巻物		岸井澄一氏蔵（神戸商船大学へ寄托）

で，恐らくは同藩水軍用のものであろう。これは手書き大型巻物で，現在は文化庁民俗資料館秋岡文庫蔵となっている。本図には航路も細かく描かれ，各島島の名称，暗礁の位置迄記されて居り，現在我が国航路図の最古のものである。その後この種類の航路図が伝写され，その終点が長崎止りのもの，尚壱岐・対馬に延びるもの，或いは九州南方の薩摩・大隅に至るものがあり，現在この種のものが数点知られている。これらの内には，江戸から大阪迄の陸路図を含めて，江戸より長崎迄の道中図巻となっているものもある。

(2) 航路図入り屏風

これには陸上にて使用する普通の屏風と船内にて使用する船屏風との二種がある。

(i) 普通屏風

神戸商船大学に本間六曲一双の瀬戸内海航路図の屏風があり，金銀丹碧紺青にて描かれた豪華絢爛たるもので誠に珍らしい。これは船頭達が使用するものでなく，西国の大名が参覲交替に際し，その行旅の前後に殿中にて眺めるものであろう。

(ii) 船屏風（又は吊屏風）

前記屏風より小さく中又は小型で，矢張り参覲交替時に，船内に持ち込みその御座に飾るものである。従って船屏風といわれる。しかし船の事とて動揺に際して倒れないように，天井から吊るようになっているので，一名吊り屏風ともいわれる。大名達はこれを見ながら，船外の風光を眺めたり船の位置を知り，又無聊を慰めたりするのであろう。従って前記屏風と同じように豪華なもので，勿論船頭達の使用するものではない。実際の処，船頭達は当該航路の事は十分頭に入っているので，航路図なんて無用なのである。

(3) 絵巻物

江戸より長崎迄の道中図として，江戸大阪間は陸路，大阪より長崎迄が海路となっている巻物があり，これも前記屏風に負けない豪華なものがある。これは参覲交替の道中，駕籠内又は船中にて見るものであろう。これも矢張り船頭達には無関係である。

(4)江戸より長崎迄の道中記

これは前記絵巻物と同様に江戸長崎間の道中記で，大阪からは海路となっている。これは普通のもので豪華なものではない。既に寛文頃（1665頃）には木版で刊行されている。

② 東海方面（含三陸地方）

東海地方とは大阪から江戸及び三陸方面を含めての海域で，江戸初期から桧垣廻船・樽廻船・西廻廻船・東廻廻船等が活躍した航域である。従って航路図が沢山手書きされている。

この中にあって宝暦2年（1750）に南洋湊方角之図が印刷刊行されている事はうれしい。大いに利用された事と思う。本航路には各種廻船が多数就航し繁昌しているが，大名の御座船が無いので豪華な図はない。

本航域中特異なものを挙げると，天保11年刊行の「改正東海舟程全図」である。これは三陸の宮古から伊豆下田迄のものであるが，これこそ航路図らしい立派な航路図である。又神戸商船大学蔵の「大阪・江戸航路便覧」は手書大型の折畳式のものであり，地形は随分崩れているが，航路は精しく記載され航路図としては上出来である。しかし大型で船内用ではない。

③ 日本海方面

この方面は下関から松前迄の日本海の海域である。この海域は往古奈良時代から拓け，江戸末期迄は所謂表日本としての航路に当り，江戸期には北前船や西廻りの廻船が活躍した所である。しかし航路図としての資料は案外少ない。しかし明和4年（1767）に「北海湊方角之図」が板行されているので，これが多用されたのかも知れない。尚本航路には，船頭が筆まめに自ら描いた航路図がある。これは因島市立図書館及び塩飽本島本陣跡にて見た事があるが，これは珍らしいと思う。

(3) 地方狭域

地方狭域とは，大阪湾・伊勢湾・東京湾その他国々の海面のように局地的な水域をいうので，幕末各地で多数印行され，手書きのものは少ない（第4表及写真第11～第15参照）。そもそもこれら狭域のものは，船頭達にとっては不用なのである。彼等はこんなものを見なくても百も承知しているのである。然るに幕末にこの種のものが，特に大阪湾，東京湾方面のものが

第4表　地　方　狭　域

名　称	版種	装禎	年　号	港間距離	方位	備　　考
八箇州船路之図	木版	折畳	文久3年(1863)	○	○	八箇州とは摂津，和泉，紀伊，淡路，播磨，備前，讃岐，阿波の八ヵ国である。海深入り砲台入りの海防図である
摂海一覧	木版	同上	同上	○	○	大阪湾内のみ。海深入り
畿海指掌	銅版	同上	元治元年(1864)	○	○	大阪湾内のみ、砲台，灯台，暗礁を示し精しい。海深入り
勢海一覧	木版	同上	文久3年(1863)	○	○	伊勢湾を主として港距を示す航路図なし
金毘羅航路図	木版	同上	幕　末			大阪―兵庫―明石等山陽道添いに田ノ口から丸亀に至るもの。この種の航路図多し。
佐渡航路図	木版	同上	同上	○	―	小木港を中心として近隣諸国への航路図入り，港距を示す
相州浦賀海辺之図	木版	同上	同上	○	○	砲台入り，この種のもの多し

多刊されているのは，当時異国船が所々に出没するので，憂国の士や智識人の海防の為のものである。

頼支峯が安政2年（1855）刊の懐宝輿地図に，一般にこの種の地図は名所旧跡を訪ねるためのものであるが，嘉永甲寅（1854）にロシヤの船が大阪に来て人心を騒がせたので，それ以来国防の見地からこの種地図が流行したとの事をいっている。

因みに幕末海に面している諸藩では，海防用に海岸図を作製し，これに海深を記入している。この海深記入は，航海漁業に必要であるが，多分為政者用と思われる。

◎附

1．我が国の地図と航路

我が国は世界でも屈指の地図多作国で，日本図以外に世界図・地方図・国図・道中図等種々の地図が作られている。総じて，地図というものは単に地形を示すだけでなく，その使用目的によって，政治地図・産業図・地質図等種々あるが，一般に使用されるものは，河川・集落・道路等のある所謂交通用図である。従って，地上には人や車の道があるのと同じように，海上には船の道即ち航路が記入されるのは当然と考えられる。そこで我が国の殆んどの地図には，必ずといってもよい程，航路図が入っている。この地図に航路図を入れるのは，日本独得のものらしく，シナや朝鮮の地図には見られないようである。

(1)　日本図と航路

我が国では，行基式日本図を脱した日本図は，桃山時代から江戸初期にかけて現われ，航路の記入が増加……先づ瀬戸内海次いで九州四国沿岸へ……して来た。そして幕府撰慶長日本図では，日本海側は敦賀以西，太平洋側は江戸以西である。同じく正保日本図では各所至る所に航路が記入されている。しかし両図共手書きで，特定の人が持ち一般人は知らないのが実情である。而して一般市販の日本図では，江戸初期末頃迄は依然日本海は敦賀以西，太平洋は江戸以西で，中期になると日本海方面では蝦夷への航路もボチボチ見られる。所が太平洋方面では，辛うじて中期以降になって，はじめて江戸より北方の航路が見られるのである。即ち航路図から見ると，東日本は西日本よりも大分遅れている事になる。

江戸中期以降になると，大抵の地図には全面的に航路入りとなる。しかし伊能忠敬の日本図には航路がない。恰も今の地理院の地図に航路がないのと同じである。又多販された水戸の地理学者長久保赤水の大日本輿地路程全図には，初版の安永8年（1779）版には航路は無いが，その後の版には沢山入っている。なお，幕末から日本地図に海深入りが現われるようになる。これは欧米の海図に倣ったものであろう。又江戸初期及び中期には，その数は少ないが，ポートラーノ式日本図が出来ている。

(2)　道中記と航路

島国の我が国では，海上交通が重要で，場所によっては「遠くて近きは海の道なり」といわれる位である。江戸中期後流行した旅行用としての海陸の道中記が多数出版され，何れも巨細に航路が描かれ，旅行者にとっては甚だ便利で重宝がられた。

(3)　地方図と航路

航路の記入は，日本図や道中図だけではなく，前記海域以外の地方即ち蝦夷・東北・四国・九州・沖縄諸島・伊豆諸島小笠原島等の図にも，細かく航路が記入されている。即ち航路入

り地図である。しかしこれらの地方には，特に航路図というものがないので，これらの地図は航路図の代りを勤めているのであろう。その一例として写真16図に蝦夷国全図を示す。

2. 我が国に航路図の発達せざる所以

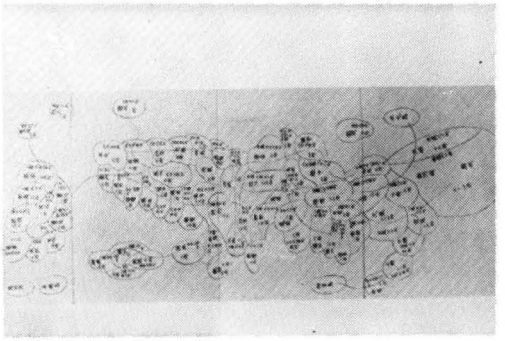
前述のように我が国では，航海者達が利用するような航路図が発達しなかった理由は下のように考えられる。

(1) 鎖国下沿岸航海なりし事
(2) 大体昼間航海で全国的に避難（風待）港が到る所にある事
(3) 航路入り地図が多販されている事
(4) 船頭達は幼少の頃より船に乗り，命がけで多くの経験を積み，しかも頭がよく勘がよい事

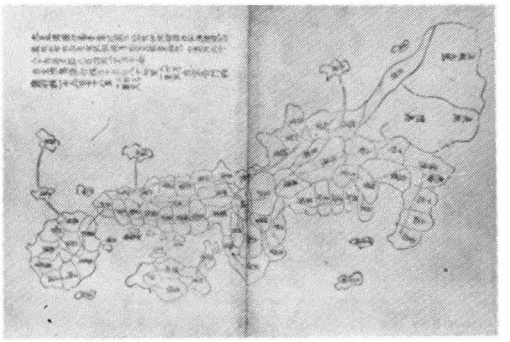
本稿を草するにあたり，調べてみた所この種の論文は余り無いので，主として本学並に筆者蔵の資料により急拠その外廓のみをとりまとめたもので甚だ未熟未完である。大方諸賢これを了せられたし。

尚各航路図の内容については，又の機会に述べたいと思う。

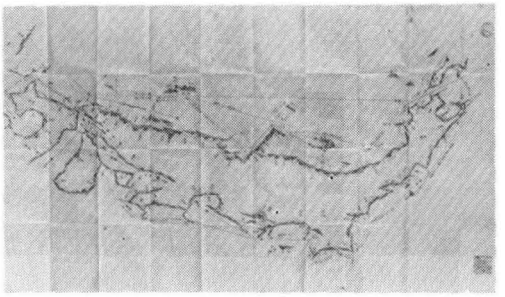
昭和52年８月稿了



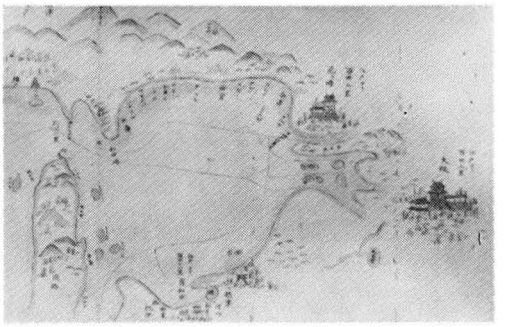
1．延暦24年輿地図



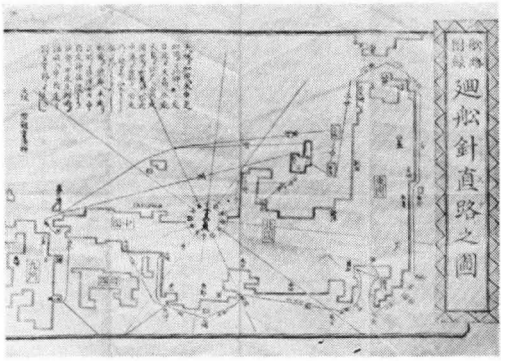
2．慶長版拾芥抄所載　大日本国図



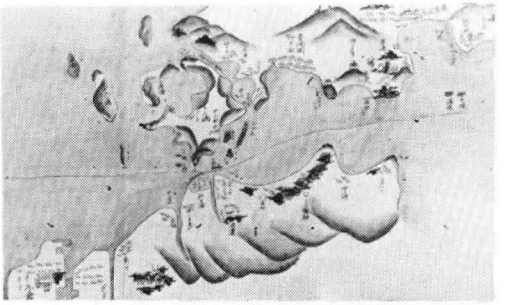
3．日本国島々針筋方位便覧



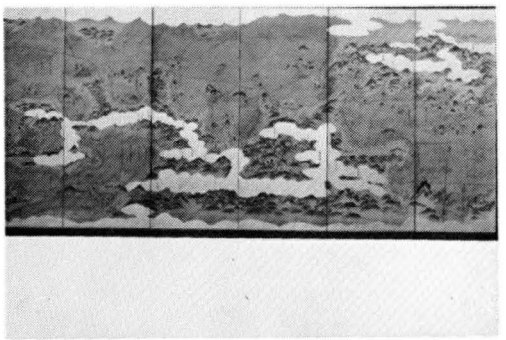
4．大日本海岸之図　巻２　部分図（大阪湾辺ノ部）



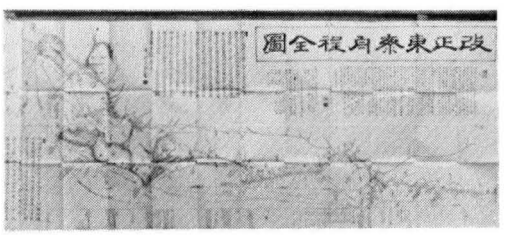
5．船路便録 廻舩針路之図（コンパスローズライン入り）



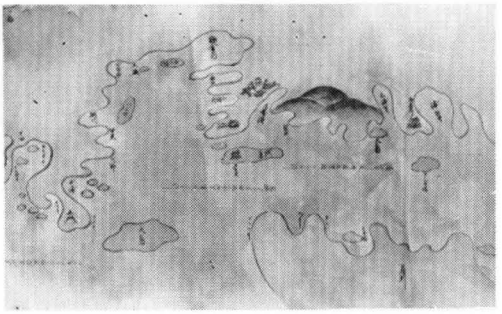
6．海瀕舟行図　部分図（関門海峡辺を示す）



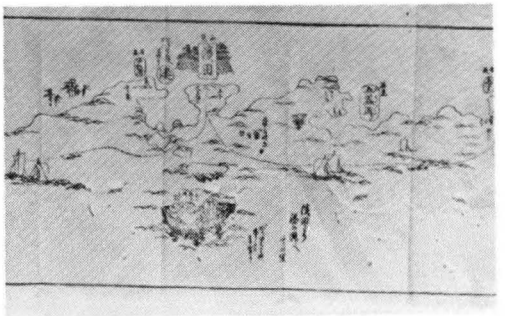
7．瀬戸内海航路図　屏風六曲一双、西半双を示す
（瀬戸内海西方から北九州より長崎に至る）



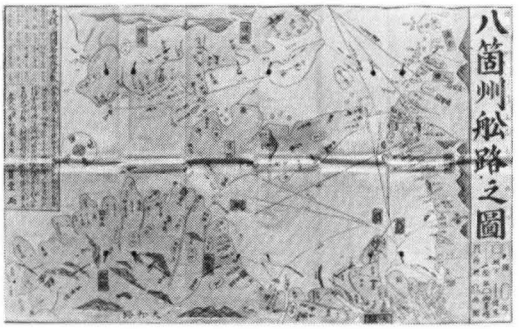
8．改正東海舟程全図



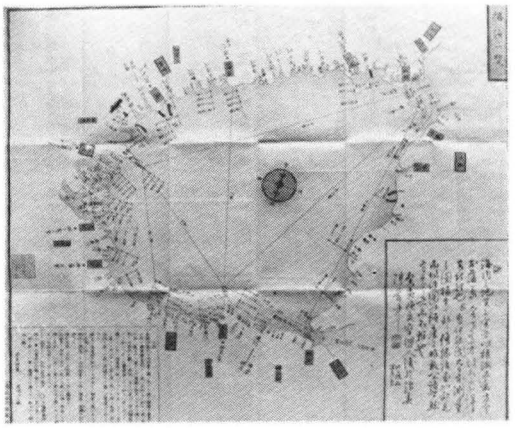
9．豆相駿遠海路図　部分図(浦賀鎌倉下田辺を示す)



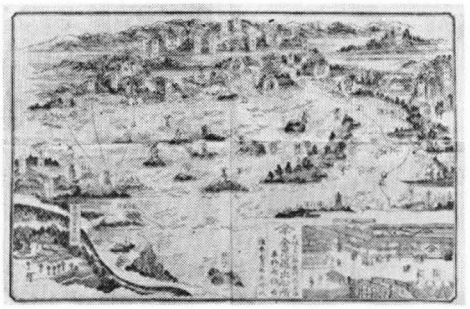
10．北海湊方角之図　部分図（石州浜田辺を示す）



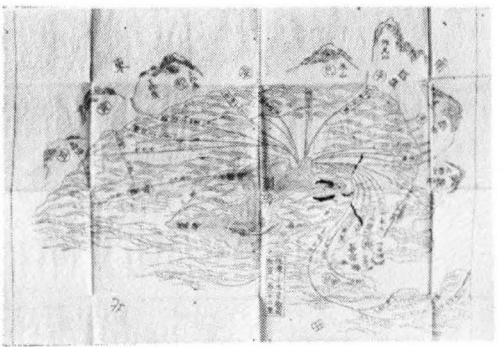
11．八箇州船路之図



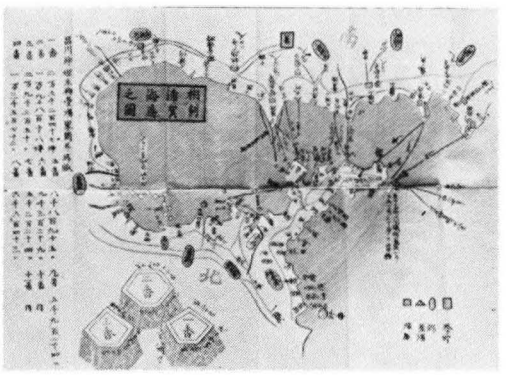
12．摂　海　一　覧



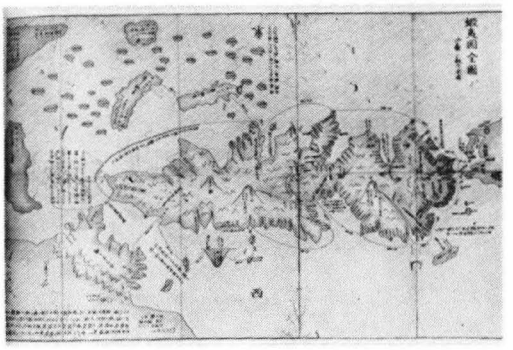
13．金毘羅航路図（大阪より中国沿いに四国丸亀に到る航路図）



14．佐渡航路図（小木港を中心としたもの）



15．相州浦賀海辺之図



16．蝦夷国全図　林子平作（蝦夷図は異形であるが航路図多し）